

青森県外ヶ浜町中ノ平遺跡出土の石刀について

齋藤 岳*・平山 明寿*

はじめに

1972年に実施された外ヶ浜町中ノ平遺跡（註1）第一次調査の出土品の中には縄文時代中期のものと推定される完形の石刀が含まれている。

この石刀は、鈴木克彦(1987)が青森県立郷土館の風韻堂コレクションの縄文時代中期の石刀を資料紹介する際に「中期後半」の類例として触れ「村越潔氏が、筆者に青竜刀形石器の祖型ではないかと教示されたことがあった」と記した資料である。筆者も青竜刀形石器に形状が類似する部分があると感じた。時期についての詳細な情報が無いために、青竜刀形石器よりも先行する「祖型」となりうるのか、青竜刀形石器と同時期で、その意匠の影響を受けた、もしくは与え合う関係にあるといえるのかを含め不明な点が多い。

縄文時代中期の石刀については、類例が少ないものの、青森市三内丸山遺跡や西目屋村水上(2)遺跡（青森県教委 2017a）等で出土している。いずれも全長がより長く、全体形状は石棒に近いものが多い。三内丸山遺跡の出土品は、計148点確認されているが、多くが被熱しており、すべて欠損品である（茅野2013）。全体がわかる資料で発掘調査の出土品は、きわめて少ないといえる。

重要資料であるが、発掘調査の報告書（青森県教委1973）には、出土状況写真のみ掲載された（図1-2）。第一次調査出土品の一部は、翌年実施された第二次調査の報告書（青森県教委1975）に掲載されたが、その中に本資料は含まれていなかった。そのため、多くの人に知られていない。

本稿は当該石刀の今後の活用を図るため実測図と写真で資料紹介する。作図と文章は齋藤が、写真は平山が担当した。顕微鏡写真はOLYMPUS社のシステム実体顕微鏡SZX7とカメラDP22を使用した。

1 中ノ平遺跡と石刀についての詳細

中ノ平遺跡は、外ヶ浜町三厩の宇鉄地区に所在する。津軽海峡に北流して注ぐ二級河川の元宇鉄川左岸の海岸段丘上に位置する。盛土遺構を伴い、縄文時代前期から後期にかけての規模の大きな集落として知られている。元宇鉄川の対岸には縄文時代晩期の有名遺跡であり、弥生時代中期の出土品が重要文化財に指定された宇鉄遺跡がある。

図1-3に石刀の実測図を掲載する。長さは37.1cm、幅9cm、厚さ4cm、重さ1,509gである。石材は凝灰岩である。板状の礫を素材としているが、基部断面図と写真1の全体写真に見られるように稜線が正面中央部から基部にかけて残る。柱状に近い礫が縦方向に割れた可能性もある。器表面は、平滑とはいえないものの、側面を含めて均質である。自然礫では側面や上下の端部には凹凸があることが多いため、器表面を滑らかにする加工がなされていると考えられる。また、整形のための敲打痕跡と考えられる小さな窪みが裏面を中心に確認できる。そのため敲打加工の後に、研磨加工がなされていると判断できる。

本資料は、概ね上下対称の素材として整えられた後で、正面下側に刃部が形成される。両面から刃部を線状にするために研磨加工により平滑な面が形成されている（スクリーントーン部分）。写真1上

部の全体写真にみられるように刃部中央は、左よりと右よりの2か所で研磨により器体が減耗したことにより、1mm程度内湾する。

基部は剥離加工で器体を減耗させた後に、敲打加工がなされている。敲打加工は粗い仕上げで終了しているので、剥離加工時に窪んだ部分が潰れずに残存している。

刃部の形成加工と基部形成加工の順序については、基部の方が新しい。関部の形成のための敲打痕跡が刃部の研磨の上に延びている。本資料で特徴的なのは、多数の線状の痕跡である。正面側に特に多い。研磨時に形成された可能性があるのはもちろんであるが、器体の左側には見られず、中央部分に集中する。写真1-1・2の顕微鏡写真に見られるように写真上部の刃部ではなく、より器体内側に集中する。不均質に形成されており、全体の整形・研磨後に、加えられたものと考えたい。スクリーントーンで示した平滑な研磨の上にも線状の擦痕があるが、中央部に比べて細い。そして、幅が0.5～2mm程度の線状の痕跡が器体の中央部から基部の敲打痕にかけて観察できる。器体の上に粗砂を置き、その上に石をあてて、引きずった後なのか、剥片等で意図的に傷をつけた物を含むのかは不明である。大きく目立ち、研磨により消されることがなく残っている。何らかの意図に伴う改変行為の可能性がある。一方、基部の敲打痕と合わせて手に持つ時の滑り止めの役割を果たした可能性もある。いずれにしても、中央部にかけての多数の線状痕は基部の敲打痕とともに、本資料を観察するものに「力強さ」のようなものを感じさせている。

また、正面には左端からの剥離が残るが、その上に研磨あるいは擦れが形成される。剥離の稜線は新しい傷で概ね失われているが、剥離で窪んだ部分にも表面に研磨・擦れが認められる。

おわりに

中ノ平遺跡では、他にも縄文時代中期の第Ⅲ文化層のもので石刀が1点「鉞状石器(磨製)」として紹介されている(図2-1)。現存部は長さ10cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmで緑色凝灰岩製である。本資料の縮尺を1/2にしたかのように、基部から関部・背部へのラインが類似する。同じ第Ⅲ文化層から、「鉞状石器(打製)」として写真紹介されているものは(図2-2)、石刀未成品の可能性がある。現存部は長さ19.0cm、幅9.9cm、厚さ5.5cmである。粘板岩製と報告されている。写真からの観察ではあるが縄文時代後期の石刀素材となるような石質と異なっており、板状節理のある安山岩やデイサイトの可能性を感じる。器体は整形のための剥離があり、さらに側縁に粗い剥離を加えて刃部となると記載されている。

縄文時代中期後半から後期前葉の第Ⅱ文化層からは「鋤状刃器」として端部がV字状となる異形の安山岩製の石棒類(図2-3；現存部は長さ19.0cm、幅9.9cm、厚さ5.5cm)が出土している(註2)。

第一次調査では、石棒の素材となりうる角柱状の礫が出土している(図2-4)。角柱状の礫は六角柱を基本としながらも五角柱状のものや扁平で不整な菱形に近い形状のものがある。中ノ平遺跡は、石刀および石棒の製作遺跡の可能性はある。

さて、中ノ平遺跡の調査は、青森県教育委員会に専門職員が配属されるようになり、埋蔵文化財保護の体制が整備されつつある時期に行われた。多くの制約のなかで調査・報告書が作成されたものと推量できる。今後、出土資料の再整理が行われれば、未成品をはじめとして、さらなる類例が抽出できる可能性がある。製作技法の把握と類例が増加すれば「中ノ平型石刀」と命名できる可能性がある。

(註1)「中の平遺跡」として発掘調査報告書が刊行されているが、遺跡台帳の名称は「中ノ平遺跡」であり、本稿では正式名称として、これを使用する。

(註2)類似する形状のものは探し出せていない。現段階で最も類似すると考えるものは、つがる市田小屋野貝塚の鯨骨製の骨篋(図2-7)、八戸市松ヶ崎遺跡出土の骨篋等である。大きさは異なるが、平面形と先端部の舌状の形状、先端に向かって研磨加工で減耗させている点が類似する。

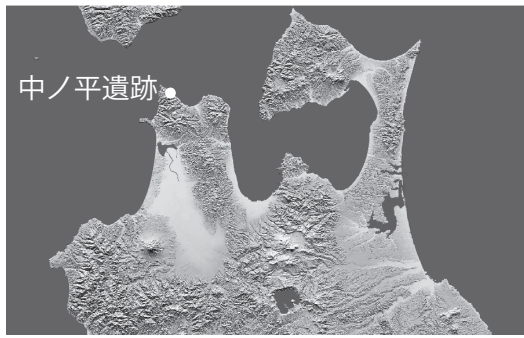
縄文時代後期前葉の石刀に関しては中期の骨刀からの出自が有力視されている(阿部2010)。中ノ平遺跡出土の2点の石刀は、図2-8の古屋敷貝塚出土の中期前葉から中期後葉の骨刀(上北町教委1983;現存長16.4cm)と形状が類似する。断面形も柄は厚みがあり、刃部は薄くなっている。本稿で紹介した石刀に最も形状に近いのは、粘板岩製で扁平ではあるが八戸市田代遺跡の石刀(青森県教委2006;図2-5;中期末の太木10式併行期)例である(なお、古屋敷貝塚例と類似するのは図2-6の階上町野場(5)遺跡(青森県教委1993)の中期後葉から後期初頭の石刀未成品である)。

鯨骨製品に目が向いたのは、前述の阿部(2010)の著述のほかに西田正規(1994)、福田友之(1998)の著作を読んでいたためである。巨大で強力な動物である鯨と人との関わりの事例(西田1994)から、津軽海峡を見下ろす中ノ平遺跡に住む人々にも、鯨が、特別なものとして意識されていたと考えるためである。福田は「鯨骨が単に大型の道具類を製作するための材料として用いられたとするよりは、鯨でなければならない呪術的な意味も含まれていたとみられる。しかし、その具体的な意味は不明である。」とした。

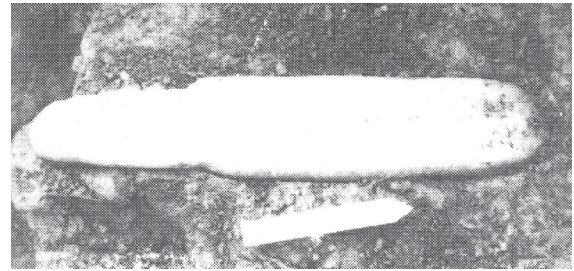
青森市三内丸山遺跡では、鯨骨製骨刀は焼けた状態で出土する例が多く(青森県教委2017b)、北海道伊達市北黄貝塚A'地点貝塚出土例では貝層中の灰の中から被熱した状態のものが出土している(伊達市噴火湾文化研究所2013)。三内丸山遺跡の石刀のすべてが破損品であり、多くが被熱していることと関係がありそうにみえる。しかしながら、三内丸山遺跡から出土する石刀は、いずれも断面・側面の形状が大きく異なる。福田が縄文時代の人々にとっての鯨骨製品の意味を不明と結論したように、鯨骨製骨刀と石刀の関係についても、類例の少ない現段階では不明としておきたい。

引用・参考文献

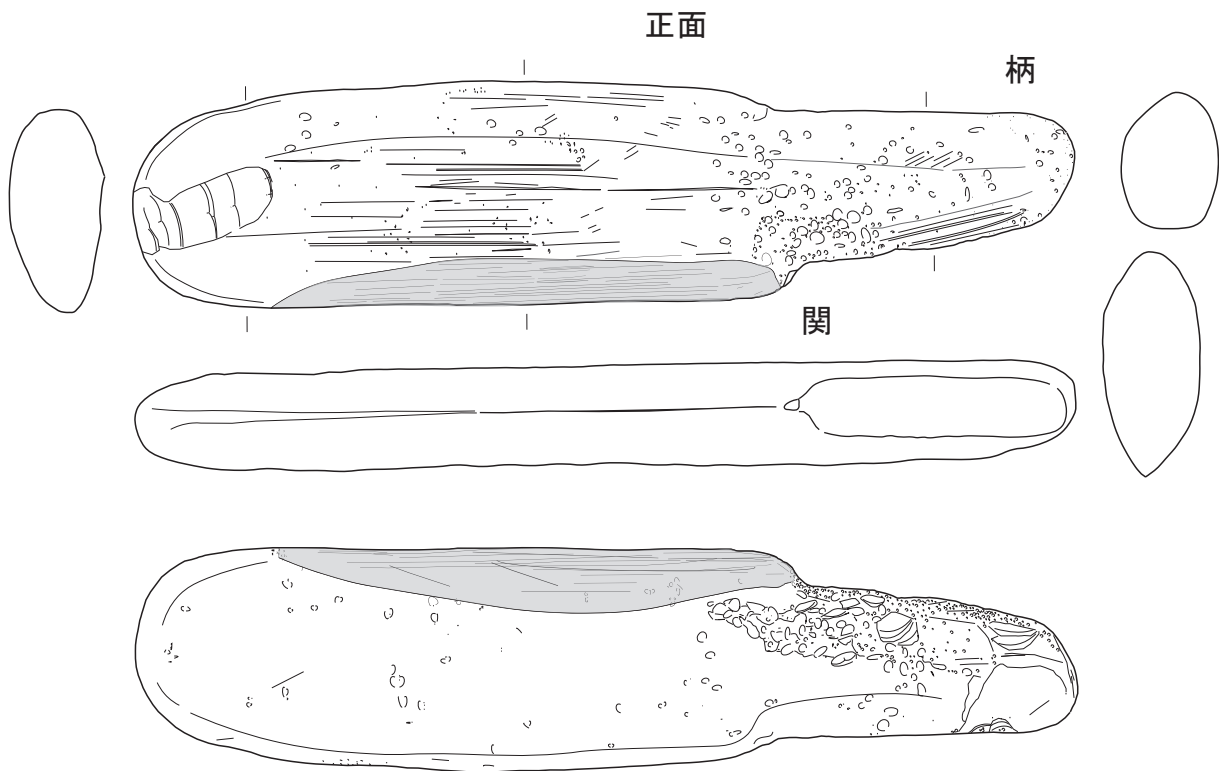
- 青森県教育委員会 1973『中ノ平遺跡発掘調査報告書』青森県7集
 青森県教育委員会 1975『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県25集
 青森県教育委員会 1993『野場(5)遺跡発掘調査報告書』青森県150集
 青森県教育委員会 2006『田代遺跡』青森県413集
 青森県教育委員会 2017a『水上(2)遺跡Ⅲ』青森県575集
 青森県教育委員会 2017b『三内丸山遺44 総括報告書第1分冊』青森県588集
 青森県立郷土館 1995『木造町田小屋野貝塚-岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書-』郷土館35集
 上北町教育委員会 1983『上北町古屋敷貝塚・I-遺物編(1)-』上北町第1集
 伊達市噴火湾文化研究所 2013『KITAKOGANE』
 八戸市教育委員会 1994『八戸市域遺跡発掘調査報告書6』八戸市第60集 82頁
 阿部昭典 2010「東北地方北部における石刀の顕在化」『國學院大學考古学資料館紀要』第16号
 小笠原善範 1997「縄文後期以前の石刀・石剣類について～青森県内の資料集成～」
 『八戸市博物館研究紀要』第12号
 鈴木克彦 1987「風韻堂コレクションの石棒・石刀・石剣」『青森県立郷土館調査研究年報』第11号
 茅野嘉雄 2013「三内丸山遺跡の石刀類・石棒について」『特別史跡三内丸山遺跡 年報』第16号
 西田正規 1994「中緯度温帯草原の指揮狩猟民」『日本と世界の考古学-現代考古学の展開-』
 岩崎卓也先生退官記念論文編集委員会
 福田友之 1998「本州北辺の鯨類出土遺跡-津軽海峡南岸域における先史鯨類利用-」
 『青森県史研究』第2号



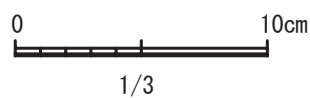
1 中ノ平遺跡の位置



2 石刀の出土状況



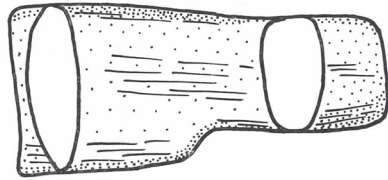
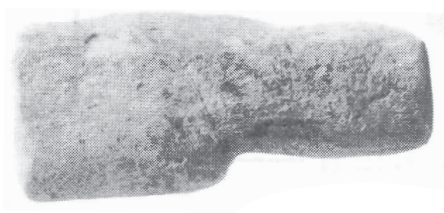
3 中ノ平遺跡の石刀



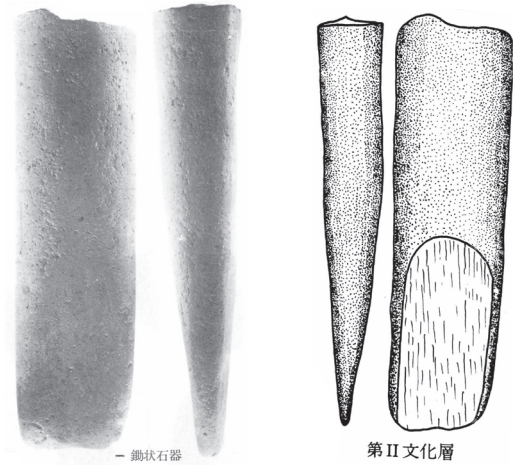
図の出典

1 カシミールを加工 2 青森県教委 1973 より引用

図1 中ノ平遺跡の位置と出土石刀



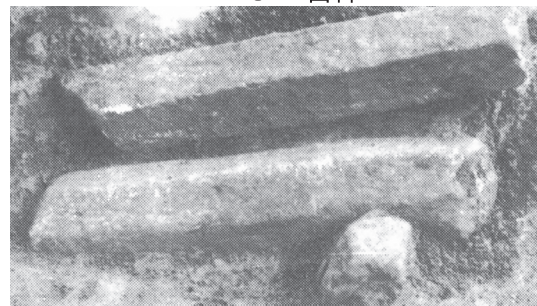
1 形状の類似する石刀



3 石棒

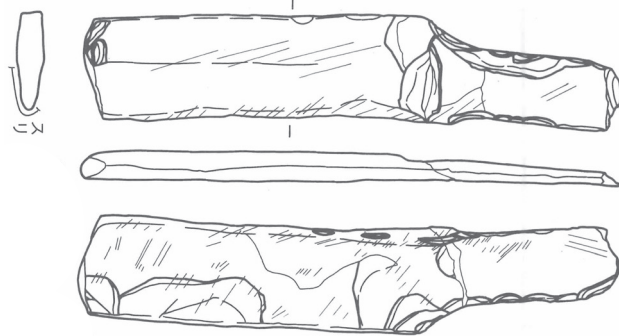


2 石刀未成品

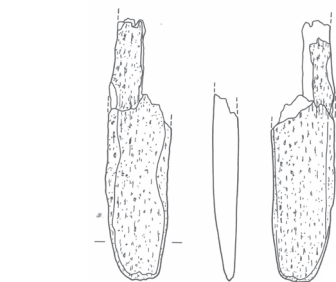


4 角柱状の礫 出土状況

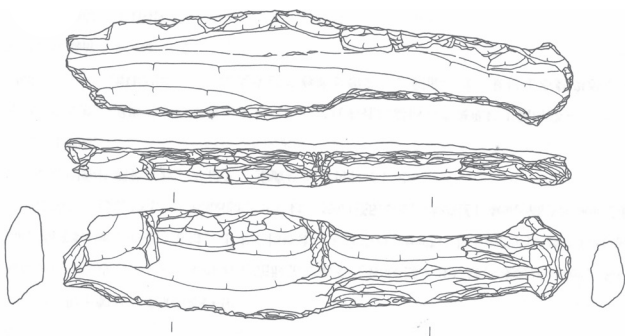
中ノ平遺跡出土品



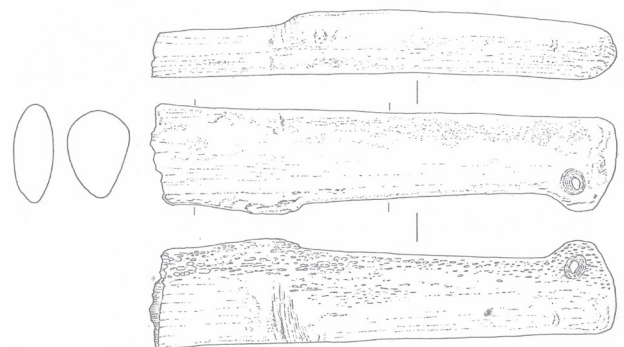
5 形状類似の石刀 八戸市田代遺跡第27住



7 鯨骨製筥 つかる市田小屋野貝塚



6 骨形と形状類似 階上町野場(5)遺跡



8 鯨骨製骨刀 東北町古屋敷貝塚

図の出典

1～3 青森県教委 1975、4 青森県教委 1973 より引用

5 青森県教委 2006、6 青森県教委 1993、7 青森県立郷土館 1995、8 上北町教委 1983 より引用

図2 中ノ平遺跡出土石刀・関連資料

全体写真



顕微鏡写真

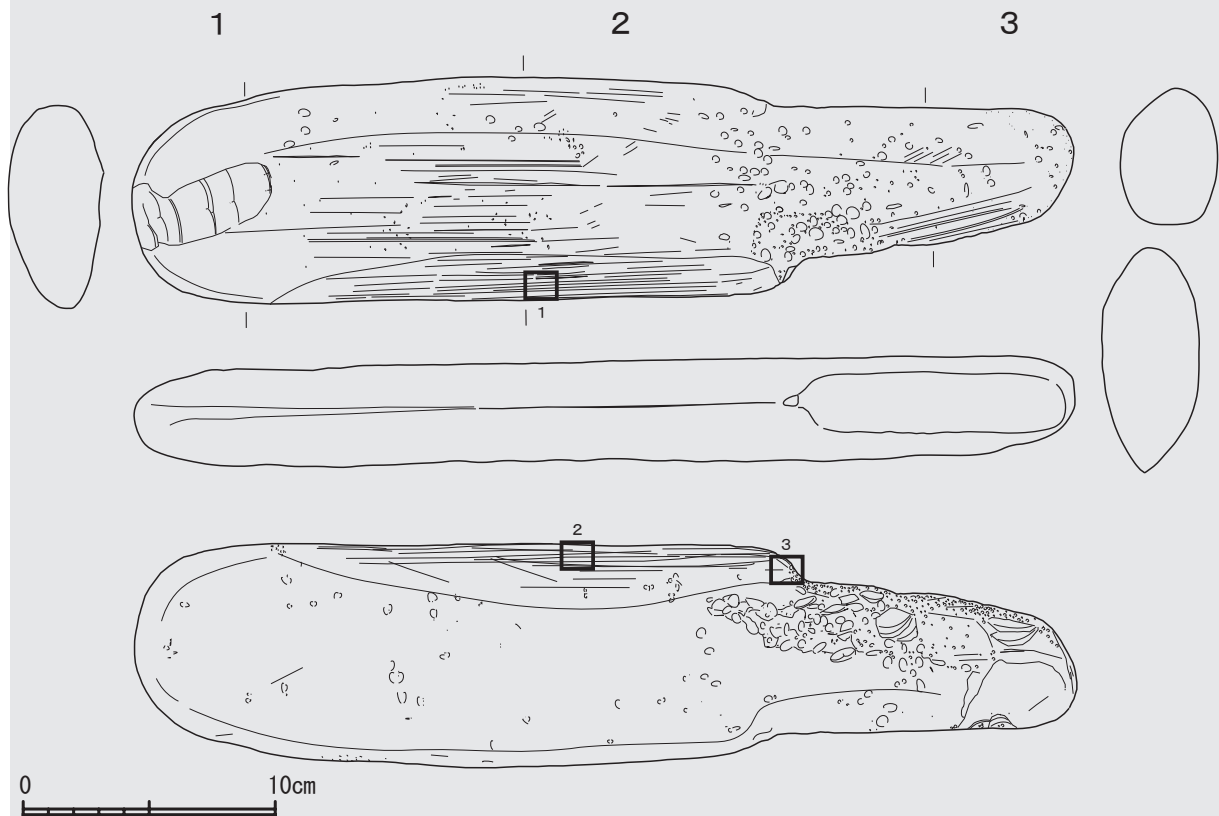
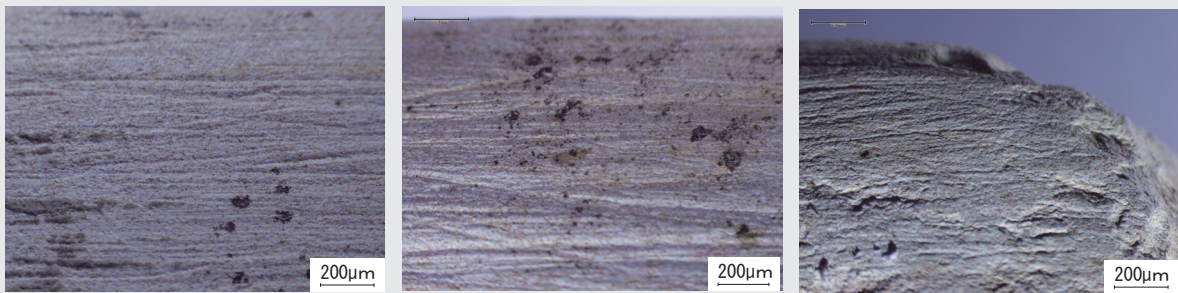


写真1 中ノ平遺跡出土石刀